

第1回 川崎市総合教育会議 会議録

日時：令和2年8月5日 水曜日 15時00分～16時30分

場所：川崎市役所第3庁舎18階 講堂

出席者：

福田 紀彦 市長
小田嶋 満 教育長
岡田 弘 教育長職務代理人
中村 香 委員
高橋 美里 委員
岩切 貴乃 委員
石井 孝 委員

理事者

○総務企画局

大澤総務企画局長

○教育委員会事務局

石井教育次長

亀川担当理事 総務部長事務取扱

田中教育政策室長

森学校教育部長

前田生涯学習部長

市川総合教育センター所長

細見指導課長

猫橋指導課担当課長

箱島生涯学習推進課長

栃木総合教育センター情報・視聴覚センター室長

辰口総合教育センターカリキュラムセンター室長

二瓶教育政策室担当課長

葛山教育政策室担当係長

事務局

宮崎総務企画局都市政策部長

山井総務企画局都市政策部企画調整課担当課長 [企画調整]

瀬川総務企画局都市政策部企画調整課担当課長 [企画調整]

亀村総務企画局都市政策部企画調整課担当係長 [企画調整]

長谷山総務企画局都市政策部企画調整課担当係長 [企画調整]

傍聴者数：0人

報道関係：0社

※ 読みやすさ等のため、文意を損なわない範囲で、重複表現、言い回しなどを整理しています。

宮崎総務企画局都市政策部長 それでは、定刻になりましたので、令和2年度第1回川崎市総合教育会議を開会させていただきます。

初めに、福田市長から御挨拶をお願いいたします。

福田市長 改めまして、こんにちは。

今年度第1回目の総合教育会議ということで、よろしくお願ひしたいと思います。

今日の議題ですけれども、新型コロナウイルス感染症への対応と、それからICTを活用した今後の学校教育について、意見交換をしていきたいというふうに思っています。

皆さん御案内のとおり、コロナウイルスの影響というのは、業種を問わずというか、全ての社会生活全般にわたって大きな影響を受けておりますけれども、特に子どもたちの学校教育もそうですし、社会教育についても、本当に休校ですとか休館ですとかというふうな形で、多大な影響を受けているというふうに思います。

そんな中で、今日は新型コロナウイルス感染症の対応、それからGIGAスクールの話というのも、当初5年間ぐらいかけて順次整備を進めていこうとっていた話が、急遽、今年度中に全ての子どもたちというふうな計画が前倒しされたことによって、いろんな課題と、それからいろんな可能性が出てきているというふうに思います。

そうしたことについても協議をさせていただきたいなというふうに思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

宮崎総務企画局都市政策部長 ありがとうございます。これからの進行でございますが、総合教育会議につきましては地方公共団体の長であります市長が招集・主宰することとなっておりますので、福田市長、よろしくお願ひいたします。

福田市長 それでは、先ほど申し上げました議題二つございますけれども、議題1として、コロナで見えてきた課題と対応の方向性について議論してまいりたいと思います。

まずは、そのことについて事務局から説明をお願いしたいと思います。

二瓶教育政策室担当課長 それでは、資料1を御覧ください。新型コロナウイルス感染症への対応について御説明いたします。

初めに、コロナ禍における各施設の状況について御説明いたします。

まず、全国一斉の臨時休業から緊急事態宣言が解除されるまでの国の動きをまとめてございます。

次に、本市の学校の状況でございますが、臨時休業期間が約3か月とございましたが、分散登校期間等を経まして、6月15日から通常登校を開始したところでございます。

続きまして、図書館の状況でございますが、臨時休館中は図書の閲覧、貸し出し等のほぼ全てのサービスが停止となりました。緊急事態宣言が解除された後、段階的にサービス提供を再開してまいりました。

市民館及び科学館や民家園についてでございますが、図書館と同様に臨時休館を経まして、段階的にサービス提供を再開してございます。

以上、各施設の状況を御説明させていただきましたが、こちらは臨時休業期間中の各施設の主な対応をまとめたものでございます。

学校では、家庭学習の支援、子どもの健康状況等の把握、児童生徒の居場所を設置してまいりました。

また、スライドには少しございませんが、本市ホームページ等におきまして、市長及び教育長から動画による学習支援ツールの紹介や「メッセージ for Kids」といたしまして、本市ゆかりの著名人などから応援メッセージを頂き配信いたしました。

社会教育施設では、ほぼ全てのサービス提供が停止する状況にございましたが、博物館、青少年科学館では、「おうちで楽しむデジタル科学館」と題しまして、自宅にしながらプラネタリウムを楽しめるデジタルコンテンツを提供してまいりました。

次に、臨時休業期間に顕在化した課題について御説明いたします。主な課題を学校教育と社会教育に分けて整理しております。

まず、課題につきましては様々ございまして、左側の学校教育では、児童・生徒、保護者、学校、それぞれが様々な課題を抱えております。

このように、中段に赤く囲っております部分になりますが、学校教育ですと、家庭とのコミュニケーションや学習保障、また、右側の社会教育ですと、サービスの提供の課題があると捉えております。課題は多岐にわたりますが、本日は課題を絞って御説明をさせていただきます。

学校教育と社会教育に分けて抽出した課題になりますが、それぞれ順番に説明をいたします。まずは、学校教育における学校と家庭とのコミュニケーションについてです。

最初に、①の学校のホームページについてですが、現在は学校ごとにホームページ作成ソフトを用いまして、一極集中的に情報視聴覚センターで審査を経ることから、迅速な情報発信に課題があります。

次に、②のメール配信システムですが、教育委員会や学校からの発信が一方通行であるため、家庭からの情報を受け取ることができないという状況にございます。

続きまして、③の公用電話、学校の電話でございまして、家庭に連絡を取る際に、各学校では2回線の固定電話のみでの対応となりまして、連絡に時間がかかることや、④の出欠席状況の確認手段が電話や連絡帳でのやりとりを基本としており、連絡事項の伝達において課題がある状況にございます。

続いては、学習保障・教育機会の確保における課題についてですが、初めに、①のオンライン学習への対応が学校によって異なっている状況にございます。Zoomを活用している学校やYouTubeで動画を配信している学校もありますが、各学校が異なった対応を取っているという状況にございます。

次に、②③ですが、臨時休業期間中は、家庭学習すべき範囲をプリント等でお示しをし、課題を配付・回収を定期的に行うことで学びの保障に努めてまいりましたが、家庭学習用の課題におきましては、一人ひとりの学力に沿った解説を行うことや、モチベーションの向上に働きかけることに関しては難しさがございました。

ここからは、事例紹介になりますが、YouTubeを活用した単方向のオンライン指導の事例でございまして、こちらのスライドは生活習慣の見直し等のメッセージを配信したものになります。

こちらは、1年生の図工の粘土を使った学習について配信したものになります。

こちらは、Zoomを活用した双方向のオンライン指導の事例になりますが、こちらのスライドでは担任と児童がつながる日ということで、子どもたちの様子の把握に努めたものでございます。

こちら、Zoomを活用した双方向のオンライン指導の事例です。こちらは、オンラインで授業を実施している様子をこちらのスライドでおさめております。

こちらは、分散登校期間中に実施されたもので、学年で同じ授業を実施してクラスを越えた授業展開をしたときのものでございます。

次に、社会教育についてでございます。これまで対面によるサービスを前提としてきたため、施設に来られない状況になった場合、利用者へのほぼ全てのサービス提供がストップしてしまった状況にございまして、休館中でも図書を貸し出してほしいとの要望が多数寄せられました。

次に、今後の対応について御説明いたします。学校教育における今後の対応案をまとめておりますが、内

容につきましては順番に次のスライドから説明させていただきます。

まず、学校のホームページにつきましては、CMS、コンテンツマネジメントシステム、こちらは専門的知識がなくても簡単に操作できるシステム、CMSと呼んでおりますけれども、こちらを導入することによりまして、効率的に学校から情報を発信することが可能になり、また、更新頻度が多くなることによりまして、保護者の皆様の興味・関心が高まることについてつなげていきたいというふうに考えております。

次に、メール配信システムについてでございますが、アンケート機能を追加することによりまして、簡単なことは即時の対応が可能となることや、集計も手間がかからないといったメリットが挙げられます。

次に、公用電話についてでございますが、こちらに関しましては、既に今年度5月にスマートフォンを各学校に配備いたしました。その結果、連絡手段が増えただけではなくて、公用のデバイスでGoogleアカウントを取得することができるようになり、オンライン指導にも役立つものとなっております。

次に、出欠状況の確認手段でございますが、保護者から学校への欠席連絡をオンラインで行うことで保護者の利便性の向上を図りながら、教員の負担軽減にもつなげていきたいと考えております。

次に、オンライン学習の充実についてでございます。対面での授業と双方向のオンライン指導の両方の方式の授業を実施できる体制を構築することが必要であると考えておりまして、いずれの指導の方式でも適切に実施できる人材を育成することと、併せて緊急時におきましても家庭でのオンライン学習環境の整備を進めることで、切れ目のない子どもたちの健やかな学びの保障につなげてまいりたいと考えております。

続きまして、社会教育についてでございますが、再び休館となった場合のサービス提供の方法や非来館型のサービスにつきましてはの検討が必要であると考えております。

こちらの表は、検討項目を例示いたしまして、それに対応する検討内容をまとめてございますが、新たなサービスの実施にあたりましては、今後も引き続きこちらの項目を中心に検討を進めてまいりたいと考えております。

以上、顕在化した課題と今後の対応について御説明させていただきました。これまでの説明を踏まえ、今後のサービス提供のあり方につきましては、サービス提供を対面型とオンライン型のプラットフォームを構築することによりまして、どちらかが提供不可能な状況になりましても、他方が補う多重化を推進していく必要があると考えてございます。

なお、この後の議題2にございますICTの活用、GIGAスクールにつきましては、コロナウイルスの以前から取組が進められてきたものでございます。

そのような中、この議題1にありますコロナ禍における現状と課題につきまして、本スライドを用いまして御説明させていただきました。

説明は以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。それでは、この間の状況を振り返りまして、皆様が感じた課題や対応策、あるいは今後の社会変容の中で教育がどうなっていくかなどについて、幅広い視点で意見交換してまいりたいと思います。

どなたからでも結構です。御発言を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

教育長。

小田嶋教育長 ただいま、顕在化した課題と、それに対する対応ということで説明がございましたが、ここに出ていない部分で私自身が感じていたこと、また何人かの校長と話して、今、学校での課題として感じていることを幾つか紹介したいと思います。

授業時数の確保については、保護者をはじめ社会的にも非常に関心の高いところではあるんですが、当初見込んでいた88%ぐらいというところから、夏休みの短縮ですとか、行事を縮小したり、準備期間を短縮

したり、そういった工夫で95%ぐらいまで回復できるという見込みが、この間、小学校の校長会との懇談でお聞きしました。

そういったところは、世間的にも非常に注目されているところなんですけど、今後、中期的に大きな影響が出てくると思われるのが、子どもたちが本来なら学校で各学年としてしっかり意識を持って高めることができる機会というのが、学校の中にいろんな場面があるんですけど、そういった機会が失われていることが、今後、大きな影響が出てくるのではないかと。

例えば、卒業式、入学式、あるいは児童会や生徒会行事、あるいは異学年交流ですとか、また、中学校では部活動での特に試合などの場が失われていくことですね。上級生の姿に下級生が接して憧れたり、自然と自分たちが今後目指したい姿のモデルとして意識していくと、そういう機会が失われていることが大変大きいかないというふうに思います。

そういったことは教えて身につくことではなくて、今後、学年に応じて自覚を持って活動に取り組む機会がないままにこのまま学年が進行しますと、その影響が中期的にどういう影響が出てくるかと。各学校では、そういったことを今までに積み上げて実績をつくってきているわけですが、それをどういうふうにつないでいくのかというのが課題として出てきているかなというふうに思います。

もう一つ、体験活動の重視ということで、ずっと言われてきているんですけど、例えば家庭科の授業の中で、保育体験、幼児体験も保育園に行つてやるということもできない状況です。あるいは、職場体験ですとか、福祉体験、そういった学校以外の場や人たちと接する機会がなくなっているということで、教科書や教室の授業では実感できない貴重な体験の場が持てないことの影響が今後出てくる、それにどういうふうに対応していくかということで、各学校でいろいろ制約がある中ですが、そういった活動の目的を明確にして子どもたちに意識化させたり、また下級生にもそういった活動の持つ意味を子どもたち、学年なりに考えさせたりとか、あるいは調べ学習ですとか、視聴覚資料を使って疑似的な体験をさせるとか、そういった工夫は考えられますが、今後、影響が出てきてしっかり考えていかなければいけない課題と考えているところです。

以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。いかがでしょうか。

岡田委員、いかがですか。

岡田委員 私のほうからは、三つお願いしたいなと思って、まず一つ目は、かわさき共生*共育プログラムの新スキームというか、新しいバージョンをつくるべきじゃないかということです。

二つ目は、教員の悉皆研修の見直し。何を悉皆研修にしてやっていったらいいか。つまり、コロナを踏まえたこれからの時代のことを考えたとき、どういう悉皆研修がいいのかということ。

そして、三つ目が、スクールカウンセラーの登用のあり方を変えないと、コロナウイルスでやってきた、つまり触れ合えない、人のつながりができないということを考えたとき、教員経験者のスクールカウンセラーを入れたほうが川崎の教育にとってモアベターになるんじゃないかという、そういう提言でございます。

先ほど申し上げたように、コロナウイルス感染症はつながりの変化だというふうに捉えたときに、家庭のあり方が変化していく、そういうことを踏まえたとき、学校の持つ役割というのは非常に大事で、先ほど教育長がおっしゃったように、体験活動等ができないところをどういうふうに補っていくのか、そこを通して川崎が大好きな子どもをどうつくっていくのかという視点に立ったとき、先ほど申しましたような共生*共育プログラムの新しいスキーム、教員の悉皆研修の見直し、この場合、ICTの研修と人間関係づくりの研修ということになると思うんですけど、ここで質の転換をどういうふうにしていくのか、質の保障をどうしていくのか、そして社会的な意味を持った授業というのをどう考えていくのかという、新たなつながりというのを考えなくてはいけないと思っています。

今回のコロナウイルスの経験の結果、例えばグローバル化はコロナウイルスにほとんど無益な、役に立たないということが分かったんですね。グローバル化は、実は経済を発展するというふうには思っていたんですが、現段階ではグローバル化がどれほど役に立っているのかというと、それほど役に立っていないだろう。

それから、富の分配ができるのがどうも国家だけだというのも今回のことで目の当たりにしてしまって、そういったところを踏まえたポピュリズムの問題とかも出てくるんでしょうけれども、家族のあり方とか、国家のあり方というか、国家というのをどう捉えるかという、そういう問題が一つあって、家庭の中でも孤食が増えているという報告がありますよね。そうするとやっぱり家庭のあり方も変わってしまいますので、学校現場でそれをどうするかということ。

それから、コロナが長期化していくときに予想されるのが、自殺者が増えるであろうということですね。川崎市は事前に様々な策を取ってきたので、今、学校現場でもそういう事態というのは、私は聞いていませんので、よかったなというふうに思うんですが、長期化していくとこの自殺者の問題も出てくるんだろうなというふうに思います。

これらの根底に流れているのが、デジタルイゼーションといって、デジタル化によってどうしていくのか。この場合のデジタルイゼーションというのは、効率化のためのデジタルではなくて、デジタルを使って新しい創出、新しいものをどうつくっていくのかという視点なんじゃないかなというふうに思っています。

ということで、それらを踏まえて、先ほど申し上げました三つを考えていくのがいいのではないかなというふうに思っています。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。幅広い多岐にわたるお話を頂きまして、ありがとうございます。

高橋委員。

高橋委員 まず、5月に市長がメッセージを保護者宛てに出してくださったと思うんですけども、私はそれを読んで、すごくありがたいなと思ひまして、学校の休みが長くなったらどうしようとか、いろんな不安を保護者が思っているときに、それに寄り添うような言葉がたくさんその中に入っていたので、まずそれについてはお礼をここで申し上げたいと思います。ありがとうございます。

3か月半ほど、子どもと私もずっと在宅勤務でほとんど家から出ない生活をして、家族全員が3か月ぐらいつと家にいるという、この先もうないんじゃないかというような貴重な体験をしたんですけども、今日の資料に関連するところで言うと、やっぱり公立小学校に通っている子どもが二人おりますけれども、一番不安だったのは、なかなか小学校とのつながりが持てないというところが、やっぱりちょっと保護者として不安が高まってしまうようなところがありました。

私は教育委員というお仕事の立場上、いろいろな情報を教育委員会のほうから頂いたりとか、先生とお話させていただくような機会もございましたけれども、そういう立場にいらっしやらない保護者さんというのは、本当に学校からもらえるお手紙が唯一の情報源みたいな方もいらっしやって、もちろん先生も大変な状況にいて、分断されてしまったというか、それぞれに子どもたちのことを心配して、何かしなきゃいけないと思っているんだけど、何をしたいか分からないし、お互いに相談したりすることもできないというような状況に置かれて、そういう意味で、今日ここに書いていただいた顕在化した学校と家庭とのコミュニケーションがなかなか紙ベースでということであまりうまくいかなかったということは、すごく、スライド9の児童・生徒の学習の遅れとか心の問題、保護者の不安感ですとか、どうやって家庭で子どもと接したり、学習を支援していったらいいのかというところで、やっぱりもっと学校と家庭のコミュニケーションがもっと取れたらもう少し何か違ったのかなというところで書いていただいたのは、非常にありがたいと思っていますし、それをベースにして、子どもたちの学習保障とか、教育機会の確保がその上に積み上がってくるのかな

というようなことは感じました。

それで、家庭ということでは、もう一つ、すごく一番心配になったのは、教育格差ですかね。例えば、うちは情報端末が割とたくさんある家なので、高校生の息子がオンライン授業になったら、それ用の端末を確保したり、夫と私はそれぞれ仕事用のPCがあって、家庭用にもPCがあって、タブレットもあってみたいな、そういう環境に幸運にもあるので、いろんな情報も取れたり、何かあったときにすぐ対応できるわけですけれども、結構、PTAの仕事をしていると「うちにはパソコンがない」とか、「私はパソコンを使えないんです」というお母さんは、お仕事をしていると分からないと思うんですけど本当に多くて、この間も息子の学校の役員会みたいなものに出たときも、かなりの数のお母さんが、「私はちょっとパソコンは使えないんです」というようなお話をされていて、そうすると子どもは使わなきゃいけないんだけど家に設備がなかったり、親がサポートできないというおうちは、予想以上に多いんじゃないかというふうに、この間もすごく思っていて、となると、端末を例えばもらったとしても、手取り足取り教えられるおうちと、全然分からないおうちというのは存在して、そうするとせっかくいいことのために使おうと思っているICTが格差を広げるための道具になっちゃうんじゃないかというのはすごく心配していて、それをコロナの状況でいろんなことが起きているときに強く感じたので、その辺りを後半のGIGAスクールのほうでも考えていかなければいけないですし、今回のコロナでも格差というところは、すごく不安に思ったところです。

福田市長 ありがとうございます。ぜひ、この話は後半にもさせていただければと思います。

石井委員、よろしいでしょうか。

石井委員 冒頭の説明を聞かせていただきまして、いろいろな課題が浮き彫りになっている中で、もう既にいろいろオンライン指導であるとか、Zoomでの授業であるとか、いろいろな形で進められているということで、非常に大変な状況ではあるんですが、やはり学校は学校でちゃんと考えてどんどん対策を打っていると。全てではなくても、こういった形ができていくというのは、川崎市の先生方の底力なんじゃないかなというふうに思いましたし、こういった事例を説明頂いて、安心した部分があります。

それで、やっぱりこうした、ここで紹介されている部分というのは、まだまだいろいろ対策を打っている中のほんの一つだと思うんですね。ですから、こういったグッドプラクティスとか、ベストプラクティスというのをどんどん集めて、それを共有して、残念ながら学校で進んでいるところと進んでいないところが出てきますけれども、それは皆さんが共有をして同じレベルに持っていけるように、こういった好事例集をぜひ共有して、市全体で財産あるいは一つの方向性の材料にしていただきたいと思いますというふうに強く感じました。

それから、以前の定例会のときに、学校が再開になったときに、生徒さんであるとか保護者の方にアンケートを実施するというふうなお話を伺っていますので、僕はこのアンケートの中にも、こういった対応についてのいろいろなヒントがたくさんあるんじゃないかと思うんですね。

ですから、これをできるだけ集計して中身を分析して、そこからまた今言ったように、グッドプラクティスにつながるようなものを抽出して、またそれをフィードバックしてそれぞれの学校であるとか、そういう形でつくっていけば、非常に今後の対応に有意義になるんじゃないかなというふうに感じています。

それから、今後の対応ということでは、GIGAスクール構想が今年度中に1人1台パソコンになると、最後の部分のほうですけれども、オンライン学習と、それから対面での授業、この両方の授業で実施できる体制の構築というのが書いてあるんですけれども、これは非常に大切だと思いますので、ハード面で整ったら、これは絶対にやるべきで、警察的に言いますと訓練というか、そういうトレーニングというか、そういうのは非常に大切になってくると思うんですね。せっかく配備されても使わないじゃだめだし。

ですから、そういったところで、ぜひオンラインで授業を実施できる体制の構築、最初からは難しいんで

しょうけれども、訓練を重ねていけば生徒も先生方も能力向上しますので、もし仮に第二波であるとか、ほかのまたいろいろな災害が起きたときに、在宅授業をせざるを得ないとか、そういった場面に非常に役に立つと思いますので、これはぜひ実施していただければなというふうに感じました。ありがとうございます。

福田市長 岩切委員、よろしいでしょうか。

岩切委員 今回、コロナということで、非常にそのときに痛感いたしましたのは、弱い人が一番最初に困難にぶつかる環境であるということでした。高橋委員のお話もありましたけれども、多分、いろんなことが整っている御家庭であるとか、いろんなことができるところは、多分それなりに誰かが対応はしていけると思うんですけども、それがなかなか難しい御家庭であるとか、学校であるとか、あるいはいろんな施設というところが真っ先に、一番困難な状況に直面したというのが今回のコロナだったのではないかなというふうに思っています。

いろんな事例で、補完ができた部分というのがあって、オンライン授業であるとか、オンラインによる指導であったりということで、補完できるものがかなりあるということも実感できたというのは一つの気づきだったと思います。

ただ、その一方で、補完できないものがあるということも私たちはきちんと見ていかなければいけないなというふうに思っていて、例えばなんですけれども、例えばスキルとか、それから知識といったようなものはオンライン授業でも学ぶことはできると思うんですけども、やはり子どもたちのつながりであるとか、いろんな文化であるとか、学校の校風であるとか、そういったものがなかなか醸成できていけないので、何が補完できて何が補完できないのかというようなこともきっちり見ていく必要があって、そういったことというのは、今すぐには結果は出てこないけれども、何かボディブローで効いてきて、1年、2年後、3年後ぐらいになって、ああ、あのときのあそこでちゃんとやってあげることができたらというようなことを思うのではないかなんてことをちょっと感じました。

また、私も、実は文化施設を運営している立場で考えますと、私たちもやはり3月から一斉休館ということで、まだ休館をしている状態なんですけれども、何となく不必要だと言われているような、そういった感覚というのもあるって、職員なんかはかなり落ち込んだりなんかする方もいたんですけども、そうではなくて、生死には関係ないんですけども、やはり文化も必要なものなんだということを改めて思いまして、いろんなところからも、やはり開けていただきたいとか、あるいはそういったところで勉強する機会をほしいということを言われていますと、やはり学校ということも全く同じことが言えると思っていて、オンラインではなく学校という場所で学ぶものというものが、何かすごく大きいものがあるんだなということを痛感しております。

福田市長 ありがとうございます。

中村委員、どうでしょう。

中村委員 先ほど教育長がおっしゃった、学びに関しては95%いつているけれども、その年代ごとにすべき社会活動というものができていないというのは、本当に私も問題だと思っております。

新学習指導要領でも「社会に開かれた教育課程」ということを言われています。今や学校だけで教育することはできないわけで、地域社会の協力を得て、これからは教育していくということに、本当に本気で取り組まなければいけないと思っています。

その際に、学校教育と社会教育を分けて考えることがもちろん大事な部分もあるんですけども、つながりを見つけていくということとか、あと、地域には本当に、特に川崎には教育に関心を持ってくださる方が

たくさんいらっしやって、応援団になってくださる可能性というのはいっぱいあるわけですね。

そういう方に助けてもらう、助けてもらうためには、海外ではラディカル・トランスパレンシー（Radical Transparency）といって徹底した透明性ということが行政では大事だと言われています。今、学校はこういうことに困っていると、こういうことをやっているということをごんごんオープンにしていって、いろんな方の意見を聞きながら教育をしていくということを考えていく必要があるのかなというふうに思っております。

福田市長 それぞれに貴重な御意見ありがとうございました。

冒頭の小田嶋教育長と岩切さんのお話というのは共通しているものがたくさんあったと、中村委員もそうかもしれませんが、何がオンラインでできて逆に何ができないのか、ということをしつかり分けて、補えなかったものというのをどうやってこれからリカバリーしていくのか、あるいは違う手法でもって補うことができるのか、というものをこの時点で一旦総括して次につなげていく。どういう手法でもって補えるのかというのを整理しておく必要というのは、とても大事なことだということをごんごん気づかせていただきました。

岡田委員からも教員の研修とか、新しいスタイルで浮き彫りになった課題に対して、教員もそうだし、どういう手法で、あるいはプログラムも、こういうふうな変化が必要なんじゃないか、新しい生活スタイルじゃないですけど、新しい教育の形というのが少し出てきているものに対して、ハード的なこともそうかもしれないけど、それを使いこなす教員とか、あるいは教員だけでないスクールカウンセラーとか、そういう人たちみんな意識を変えていかなきゃいけない、というお話も頂いたと思います。

全くそのとおりでなというふうに思います。現状をどういうふうに把握するのかということをしつかりしないと、次なるステップというものが生み出されてこないと思いますので、そこはかにかに市長部局と教育委員会が情報共有していくか、こういうところがすごく大事なことだと思わんでも、学校教育、社会教育のところだけじゃない部分のコロナの影響というのが、実に家庭にも、家庭に影響があれば教育現場にもすごく影響があるということだと思わんでもね。様々なところを複合的に捉えて、今の課題というのをまず認識して、それを補完できるものは何かということをごんごん探っていくかなければならないと思います。

石井委員からもグッドプラクティスを横展開していくという話もございました。今回のコロナに対応した学校は、それぞれが手探りの中でいろんなことをやっているという私も認識していますが、その中でも各地区ということでもなく、各学校によってそれぞれいろいろ違いがあって、よい取組というのはみんなで共有していく、ということは次の対応に必要なことかなと思っておりますので、大変示唆に富む御意見をそれぞれに頂いたと思っております。

高橋委員の問題提起については、まさに次の議題のところ、しっかり議論させていただきたいと思わます。

それでは、次の議題でありますけれども、ICTを活用した今後の学校教育のあり方についてということで、まずは事務局から学校教育のICT活用についての取組状況、説明をお願いいたします。

二瓶教育政策室担当課長 それでは、資料2を御覧ください。ICTを活用した今後の学校教育のあり方について御説明いたします。

初めに、学校のICT環境の現状を御説明いたします。本市の学校におけるICT環境の状況でございますが、学習者用のパソコンや、校内LAN環境の整備については御覧のとおりとなっております、ICT環境が整っているとは言えない状況でございます。

課題につきましては、パソコンを活用した授業を日常的に行うことができないことや、パソコンをストレスなく効果的に活用することができないことなどが挙げられます。

続きまして、GIGAスクール構想の概要と対応につきまして紹介してまいります。GIGAスクール構

想とは、1人1台端末及び高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備し、並行してクラウド活用を進めることで、多様な子どもたちを誰一人取り残すことのないよう、公正に個別最適化された学びを学校現場で持続的に実現させることを理念に掲げております。

こちらのスライドの図は、GIGAスクール構想のイメージ図でございます。端末・通信ネットワーク・クラウドの活用が3点セットとなりましてGIGAスクール構想の取組を進めてまいります。

こちらは、整備の概要でございます。校内通信ネットワークの整備と児童生徒の1人1台端末の整備の二本柱となっております。整備にあたりましては、それぞれ国からの補助金を活用してまいります。

続きまして、整備スケジュールでございますが、当初は令和5年度までに小・中・特別支援学校の全校に端末を配置する予定でしたが、国から緊急時においても、ICTの活用により全ての子どもたちの学びを保障できる環境を早急に実現することが示されまして、オンライン学習への対応が早急に求められ、スケジュールを前倒しし、令和2年度内に端末を全校に配置する予定となっております。

また、家庭学習のための通信機器の整備ということで、Wi-Fi環境が整っていない家庭に対しましても、モバイルルーターを貸与することで感染症や災害の発生等の緊急時におきましてもICTの活用により、全ての子どもたちの学びを保障できる環境を実現してまいります。

次に、1人1台端末の活用イメージについて御説明いたします。こちらは、先端技術や教育データが活用される教育現場について、教員、子ども、保護者の視点から見たイメージ図でございます。

クラウドを活用し、様々なデータを収集・分析することで、様々な可能性が広がることが期待されております。

こちらは、1人1台端末・高速通信環境を活かした学びの変容のイメージになります。まずはステップ1から始めて、1人1台端末の活用を始め、ステップ2の教科の学びを深める段階に移行していき、行く行くはステップ3の社会課題の解決や夢の実現に生かしていけるように、ステップアップしていく必要がございます。

続きまして、1人1台端末による学びの変容についてでございますが、(1)といたしまして、学習活動と(2)校務の効率化についての話を御説明いたします。

学習活動については、三つの学習スタイルを中心に、それぞれの学習スタイルをうまく組み合わせ、授業を展開しておりますが、ICTを活用することで、子どもたちにとってより分かりやすく理解が深まる授業の実現につながるものと考えております。

次のスライドから細かく御説明いたします。

まず、一斉学習では、子ども一人ひとりの反応を把握できることや、クラスを越えて授業を行うことが可能となるなど、双方向型の展開が可能となっております。

次に、個別学習につきましては、個々が同時に別々の学習が可能となることや、AIドリル等を活用することにより、繰り返しや巻き戻しての学習をすることが容易になり、一人ひとりの教育的ニーズ・理解度に応じた個別学習や個に応じた指導が可能となっております。

続いて、協働学習でございますが、全ての子どもが情報の編集を経験しつつ、多様な意見にも即時に共有しながら触れることができるようになっております。

続きまして、1人1台端末の活用によりまして充実する学習についてでございますが、調べ学習、表現・製作、遠隔教育と端末を活用することでできることが増え、充実した学習になる一方で、情報モラル教育につきましては、子どもたちがトラブルに巻き込まれないように、今まで以上に力を入れていく必要がございます。

こちらは、ICTの効果的な活用(例)でございます。AIを活用したドリルや、遠隔・オンライン学習等、様々なツールを活用しながら、誰一人取り残すことのない、個別最適化された学びの実現に向けた取組を推進してまいりたいと考えております。

1人1台端末や校内高速大容量の通信が可能となる環境の整備をすることで、校務の効率化を図り、教員の負担軽減にもつながるものと考えております。

具体的には、ドリルやテストの自動採点や、授業準備や成績処理の作業にかかる時間の短縮、また、テレワークの実施などが挙げられます。

課題と今後の取組につきまして、まず教員への研修につきましては、双方向のオンライン指導の充実へ向けた研修やICTを効果的に活用して指導できる能力の育成を行ってまいります。

また、研修を進める側といたしまして、指導主事側の担当職員にも学校と同じ端末を配置するなど、ICT環境全体を整えてまいりたいと考えております。

次に、情報セキュリティに万全を期すため、個人情報保護のルールづくりを進めてまいります。学校への支援につきましては、GIGAスクールサポーターやICT支援員を配置し、人的支援をしてまいります。

また、エビデンスに基づいた学校教育の改善につきましては、様々なデータの蓄積や整理を行い、分かりやすく可視化することで、的確な指導や支援につなげてまいります。

最後になりますが、今後のスケジュールについてでございますが、1人1台端末を本格的に活用できるのは令和3年度以降となっておりますが、課題の検討や取組を確実に進めることで、学校がスムーズに1人1台端末を活用できるよう環境を整え、誰一人取り残すことない、個別最適化された学びの実現に向けた取組を進めてまいります。

事務局からの説明は以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

それでは、ただいま事務局から説明がありましたけれども、GIGAスクール構想の推進にあたりまして、学校現場へのICT活用が一気に加速し、様々な活用が想定されています。子どもの学びの視点、教員の視点、保護者の視点のほか、こうした転換期に求められる教育の役割等についても御発言、御提言を頂きたいと思っております。

どなたからでも結構です。

高橋委員、お願いします。

高橋委員 先ほども格差の話をしたんですけれども、いろいろと私なりにICTと教育ということ考えたときに、大きく三つのことができるのかなど。やらなきゃいけないのかなというふうに考えております。

一つは、従来のGIGAスクール構想とか、その前からのICTを教育に使っていこうというときの文脈でよく語られる、より分かりやすいとか、より深い学びをどうやってICTで実現していくか、多くの子どもたちの授業なり、学びをどうやって充実させていくかという話の一つと、それから、今の教育システムとか学校の学び方の中で、困っている、困り事がある児童生徒にどういう支援ができるのか。例えば、教科書、字が読めない子たちのために、教科書の字を大きくするとか、教科書を読み上げるというものは、大分前からあるんですけど、なかなか活用が進んでいかなかったものをどうやってたくさん子どもたちが、そうやって眼鏡のようにICTを使って、自分の困り事を解決して学びをもっと進めていくかという視点が一つ。

あともう一つは、やっぱりコロナや、去年というか、ここ数年続いているいろんな災害で学校が避難所になったり、学校自体が休校になったり、場所がなくなってしまったときでも学びを止めないということ、その学びを保障していくという、その大きな三つぐらいがあるのかなとは思っているんですけど、やっぱりこれはシステムを組んでやっていくときって、やっぱり割と具体的にこういうことをしていくということを想定しながら、どうやって使っていくとか、どういうシステムを組んでいくかということをやっているかないと、結局何もできないシステムがつくられたり、アプリケーションや端末はあるんだけど、どうやって使っているか分からないみたいになるので、割と構想して、進めていくときは、具体的なことをイメージしな

がら進めていくことはすごく必要かなというふうに思っていて、石井委員が先ほどグッドプラクティスというお話をされていたと思うんですけど、大きな三本柱のうちの一つ目と二つ目、学びを豊かにするということと、今ある困り事を解決するという取組は、もう従来から川崎でたくさん先生の先生が研究されていると思うので、そういう蓄積の中から、種というか、そういうところを見つけて、さらに今までニトリタマゴで、機器とネットワークがないからできませんと言っていたところを飛び越えて、どんどんグッドプラクティスを広げていくというようなところを、そういうやり方もあるのかなというふうに思っております。

福田市長 ありがとうございます。

どうぞ。

岡田委員 高橋委員の今の御意見というか、考えというか、本当に全く賛成でございます。先ほど高橋委員が市長のメッセージがすばらしかったというのと同時に、実は私は、小田嶋教育長のメッセージも非常にすばらしくて、地に足のついたメッセージだったというふうに思っています。というのは、たまたま他市の指導主事で、川崎で生活されていて、お子さんが川崎に通っている方がいて、その方が自分のところと比べて、このメッセージはすごいですねと私に吐露してくれまして、しかもその学校は教育長のメッセージが表で、裏側に校長のメッセージが入っていた。たまたまそうだったのか、そういう意図は僕には分からないんですが、この表裏一体感も学校と教育委員会が一体となっているというのが、如実に分かるので、うちの市もこういうふうにしたかったなという発言をされたんですね。

言いたかったことは、地に足がついているということはとても大事だというふうに思って、GIGAスクール構想というのは、つまりアダプティブラーニングという、個別の最適化の学びそのものだというふうに思うんです。それと、高橋委員がおっしゃったようないろいろな困り事とか、そういうものも全て個別最適化のためにどういうことができるかという、そういうプラットフォームづくり、つまり、学習者本位の教育が実施されるためのプラットフォームづくり、これがすごく大事なんだと。それは、実はSociety 5.0の人材育成につながっていなければならないし、その意味で次期学習指導要領で言われるであろうというSTEAM教育につながっていくというのを意識した上でつくり上げていくのがいいんじゃないかなというふうに思っております。

具体的に言ってしまうと、かわさき教育プランの中にこのGIGAスクール構想のものを当然これから入れていくことになると思うんですが、そこで明確な方向性というか、それを示していく。それから、組織をどういうふうにならに創出するのか。このGIGAスクール構想って私はパラダイムの転換にすらなる可能性を秘めているので、そういう視点に立って新しい編成、成るほうの編成と、制度のほうの制の編成の両方を考えなくちゃいけないというふうに思うんです。

そういった意味では、この構想をしていくことに従来のように学識経験者、そういう体制をつくるたびに学識経験者を入れることは賛成ですが、ぜひICT企業関係者を入れてほしいなというふうに思います。企業の考えていることを教育にどう生かしていくか。岩切委員がいらっしゃるわけですから、岩切委員のように、日本のトップ企業で働きながら、さらに世界とのつながりの中で、様々な国に行かれています、そういう御経験のおありになる方がいて、それから、石井委員も外国での生活経験をお持ちになっているので、そういう視点が必要だというふうに思うんですね。

さらに、GIGAスクール構想にはもう一つ英語教育という視点を忘れずに入れてほしいなというふうに思います。英語教育にあたっては、川崎バージョンをつくっていくという、この視点ですね。たまたまこの間発表された英語教育で、市の規模がほとんど変わらないさいたま市が政令指定都市の中で1番で、2番が横浜市だったというふうに思うんですが、さいたま市は2005年から実は英語教育を導入して、特区の申請をして、特区として2005年からやっています、これは実は、川崎でいう共生＊共育プログラムと同じも

ので、ハートプログラムというのがあるのですが、これを35単位時間の中で半分に分けて、片方が英語、片方が人間関係づくりということでやっているんですね。だから、2005年から脈々と続けていったものが、ここで成果として表れてきたんじゃないかなというふうに思うんです。そういった意味でも、川崎が新しいスタイルになっていくときに、この英語という視点を絶対に忘れないでいきたいなというふうに思いました。

一例ですが、茨城県立並木中等教育学校というのがICTで先進的な教育をしている学校の一つだというふうに思うんですが、そこで、2019年だったかな、私は知ったんですが、例えば、最初の研修でロイロノートのアプリの研修をしているんですよ。そうすると、ICTの中にロイロノートを入れるか入れないかという問題で、入れたときにどんなメリットがあって、どういうふうに授業に活用できるのかという、そういうところからスタートするんじゃないかと思えますし、並木中等教育学校ではAL指数というのを入れ始めて、アクティブ・ラーニング指数というんですけれども、今やっている授業の中にアクティブ・ラーニングの要素をどれだけ入れるといいかという、教科ごとに、単元ごとに決めているんです。40%入れる、60%入れるみたいに。こういうやり方もあるんじゃないかなというふうに思います。

最後に、先ほど申し上げたデジタイゼーションというのは、効率化ではなくて、創出するんだという視点にたったときに、このICT教育の中でとても大事なことの 하나가、例えば、私たちの大学教育でいくと、ムークスというのがあるって、世界中の大学教員の授業を学生さんが見ることができるんです。しかもタダです。一般的にいうと、TEDみたいなものです。Technology Entertainment Design ですかね。あれも自由に見ることができます。ICTを入れると、この単元の授業は、この先生のやり方がベストといたら、それをもしかしたら全市で同時にそれを開校することができて、だけれども、その学びをしたときに目の前のお子さんのことを考えたときに、ここはこう変えたほうがいいのか、新たな授業のあり方というんですかね、そういうものも出てくる、そういう可能性も持っているのではないかなというふうに思います。

ということで、表に戻って、元になるところのプラットフォームをいかにつくっていくのかという、とても大事なところに今来ているので、これを様々な知恵を借りながら、教育現場だけではなくて、企業の方々の発想とか、力も入れながら、そして同時に、保護者の方々の発想というか、それも入れないといけないと思うんです。そういう視点に立って、すごく大事な局面に今なっていて、この場面に出くわしている私たちは、ある意味すごくやりがいがあるというんでしょうかね。これからの川崎をつくっていく元をやっていることになりますので、そういう意識でいったらいいのかなというふうに思っております。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

中村委員、いかがですか。

中村委員 今、岡田委員がいろいろとおっしゃっていて、ICTが入ることに、GIGAスクール構想によりいろいろと可能性が広がっていくと。夢がありますよね。

一方で、こういう新しいことをやりますと、先ほど高橋委員がおっしゃったような格差の問題とか、あと、いろいろできるとは言っても、そこへのモチベーションをどうやって持たせるかというところがすごく大事になってくると思うんですね。

そこで私はインターネットで何が一番いいことなのかなと思うと、世界とつながれるということで、川崎市にも姉妹都市とかいろいろとありますので、そういうものを活用して、海外の子とつながってみたりとか、あと、そのためには英語も必要になってくるでしょうけれども、そういうことを通してモチベーションを上げるということにいかに市長部局と連携できるか、というところで考えていく必要があるのかなというのが一つです。

それからもう一つは、岡田委員もおっしゃいましたけれども、研修で企業とかに教員が行くということも大事なのかなと思っています。海外に行ってもいいかもしれませんし、いろいろと新しいことを始めるに当たって、見分を広げていけるような取組を応援していただけるとありがたいなというふうに思っております。

福田市長 岩切委員、いかがですか。

岩切委員 G I G Aスクール構想は本当に夢のあるお話だと思います。ただ、現場は多分2023年までということが急に今年度中というふうになって、非常に慌てていらっしゃるんじゃないかなということは、もう容易に想像できます。

一つだけぜひお願いしたいということがありまして、それは何かというと、サポート体制をきちっとしてほしいなということなんです。そのサポート体制って何かというと、ここの構想の中にもありましたけれども、誰一人取り残すことのない教育をやるためにICTを導入するんですから、このICTをやるに当たって、子どもがまず最初につまずいてしまったらおしまいなんです。それから、子どもがつまずいてしまうように、多分教師の中でもつまずかれる方はいらっしゃるんだと思うんですけど、そういう方を本当に誰一人取り残すことのないようなサポートはぜひお願いしたいなと思っています。

ハードウェアは提供されますし、それからソフトウェアも何をやるというふうに目的を設定すれば実現していくんだと思います。ただ、そこら辺の人的なサポートであったりとか、かゆいときに手が届くような本当にサポートというのが、本当に誰一人取り残すことのないというところにつながっていくと思いますので、これをお願いしたいなというふうに思っています。

多分、いろんな企業で今ICTを使っていないところがないと思うんですけど、そういった企業も何十年前かに事務管理責任者とか、IS担当とか、もう本当にくだらないことまで全部答えられる方がいて、サポートしてきたから今があるのであるということで、ぜひそういった体制を、もし市の中で難しいのであれば、いろんな企業の協力を得ながら、ぜひ実現していただきたいなということを思います。

それから、やはりこのICTが何がすごいかというと、やはり、どこでも、誰でも、いつでもつながれるようなそういった環境を提供していくということで、世界はもう本当に広がっていくと思います。その広がっていくときのツールなんですけど、そのツールが最大限に発揮できるような教育をステップで、何を、いつまでに、どんなことを学んでいくとそれができるのかというのを、やはりカリキュラムをちゃんとつくっていただきたいと思いますというふうに思っています。

それと同時に、ちょっとセキュリティのところの話もありましたけど、これが万能だけではなくて、やはり危ないものでもあるということは、子どもたちにも分かってもらいつつ、使えるようなそんな環境をぜひ、先ほどのサポートというところも含めてなんですけれど、お願いできればなというふうに思っております。

福田市長 ありがとうございます。

石井委員、いかがですか。

石井委員 これも先ほどの説明の中で感じているんですが、子どもたちのためのG I G Aスクールということで、G I G A構想ということで非常に大切ですが、それをいろいろと教えるとか、授業の中で使っていくとか、先生方の能力といいますか、先生方のいろいろな対応ができないと、絵に描いた餅に終わってしまうと思うんですね。その中で、校務の効率化というのが、このG I G Aスクールでまた言われていまして、僕も家内が教員をやっていたものですから、先生がすごく大変だというのは本当に肌身に感じていまして、なおかつ、もう今の先生は本当に忙しいというのはよく理解しております。その上にこのG I G Aスクール構

想で、来年度から始まるということになれば、簡単に見ていても、仕事は増えていくのかなという気がするわけですね。

ですから、ICTを導入して、GIGAスクールを導入して、校務の効率化、先生にもきちんと働き方改革をしていただいて、いろいろな時間も余裕を持っていただいて、それが授業の濃度の濃さにつながるとか、いろいろなスキルをまたアップしていただくという、こういうことが非常に大切なんだと思うんですね。ですから、先生の負担にならない、そういう運用の仕方というのは非常に大切で、そこではやっぱりトップですね。学校全体としてやっていけば、校長先生ですから、校長先生が先頭に立ってやっていかないと、なかなか学校全体には広がらないと思うんですね。ですから、いろいろなところに支援、外国の支援に行っても、幹部がなかなか新しいことをやるときには、どうしても保守的になったり、今までどおりのほうが自分は楽なので、そういう傾向に陥りがちなんですよ。ですから、外でセミナーをやったりするときも、幹部は幹部だけで特別に行ったり、あるいはワークショップをやったりとかしています。ですから、校長先生は本当に忙しくて大変なんでしょうけれども、校長先生がしっかり旗を振っていただいて、自らが責任、リーダーシップを発揮していただいて、先生方の校務の負担軽減というか、合理化にぜひ取り組んでいただきたい。そうしないと、子どもたちに裨益しないと思うんですね。ですから、ぜひそういった点も忘れずに進めていただければと思います。

福田市長 ありがとうございます。

高橋委員、どうぞ。

高橋委員 今の岩切委員のお話と石井委員のお話を受けて、私もサポート体制ということはすごく大事に考えておまして、いろいろな文科省の予算とかを見ると、正直サポートの体制のところのお金が非常に乏しいと思っていて、素人から見ても、10万台以上の端末がぶら下がって、160以上の拠点があるネットワークを一大ネットワークを使って、さらにそれをいろいろな、何ならどんな利用をするのかというのもまだあまり想定ができていないという、すごく壮大なネットワークシステムができるわけで、それは端末だけがあっても使えなくて、先生たちや子どもたちが実現したい教育の形をシステムに落とし込むというの必要ですし、いろんな不測の事態が起きるたびに学びが止まっていますは困るので、すぐに再開できるようなサポート体制も必要なので、その辺りは単年度ではないので、もうシステムを構築したら、サポート体制とか、メンテナンス、保守というのはずっと続くものなので、それは市長にお願いするしかないと思っていますので、強くお願いをさせていただきたいと思います。

家族がIT業界に勤めていて、そのような仕事をしているのも何となく大変だなというのが分かったり、自分も大学の仕事で先日もSSLの対応をしようと思って、3日かかって結局申請ができなかったとか、それで仕事が止まったりということは、割とITは便利だけど、すごく小さなことでつまづいて、それで何か月も止まっちゃうというようなこともあるので、そこは強くお願いしたいのが一つと、あと石井委員がおっしゃられていた先生方のマインドというんですかね、意識の問題で、中村委員も世界に広がる、世界につながるというお話をしていたんですけど、やっぱりコロナの間にいろんなICT関連のルールみたいなものが出たと思うんですけど、私の読み方だと、最終的には先生頑張れ、現場の先生の責任で頑張ってください、校長先生の判断でというふうに書いてあって、でも多分、岩切委員にお聞きすれば分かると思うんですけど、一般企業のほうはもう人間は間違うのが当たり前だから、人間の間違いを前提にシステムやネットワークが組まれていて、何か間違ったことがあっても大事な情報が漏れないとか、そういうシステムを組む方向に行っていると思うんですけど、ぜひそういう考え方をちゃんときっちり入れていただいて、現場の先生が責任とか、負担を負うのではなくて、ちゃんとシステムとして、もちろん子どももどんな使い方をするかわからないので、ユーザーのそういう自由に使えるものの反対側にある危なさをちゃんと補完してくれる

ような、そういう仕組みのネットワークにするためにも、結局サポートが大事ということで、ぜひお願いしたいと思います。

あとすみません。先生たちが今、すごく守りに入っちゃっていると思うんです。何かあるとやっぱり、先生のところ、先生の責任じゃないですけど、いろいろな保護者の声ですとか、世間の声ですとか、やっぱり批判が、いろんなネットが発展して、批判がすごく強い世の中になっているので、先生たちが守りに入っちゃうところがあるんですけど、ICTって守りに入ると全然生かせないシステムなので、もっと学校とか、勉強とか、学びをどんどん広げていきましょう、中村先生が最初におっしゃられたトランスペアレンシー、どんどん広げて発信していきましょうという、そのマインドを変えるというのもすごく大事だなと思っています。

岡田委員 岩切委員の発言を聞いて、そうだというふうに思ったんですけども、先ほど、岩切委員はあらゆることに答えてくれる人がいるというふうにおっしゃったと思うんですね。新しい組織とか体制をつくるときに、このGIGAスクール構想のときに大事なのが、いわゆる実行可能性のある調査をしてほしいんですよ。フィージビリティ・スタディというもので、何か自分たちの現状を守っていくための調査とかではなくて、実際にこれが子どもたちにどう生かされるのか、もっと言うてしまうと、僕はこれを思ったときに、教員は二極化しそうだと思ったんです。自分のことを例にすれば、ついていけないある年齢の先生方と、「よっしゃあ」という先生方に分かれてしまうような可能性もあって、そこをしっかりとフィージビリティ・スタディで実行可能性のある調査をした上でやっていくと。

実は、このGIGAスクール構想に必要なのもう一つが、岩切委員が言ったように、メンターの養成だというふうに思うんですよ。子どもたちの個別最適化に対するメンターとしての教師の役割。もしかしたら、授業という言葉がアクティビティに変わる可能性だって十分にあるのが、このGIGAスクール構想じゃないかと思っていて、変わるかどうかは分からないんですが。そうすると、メンターとして教師がどんなそれぞれの子どもたちのアクティブ・ラーニングを支えていくのか、これが必要なんだと思っています。

そして、あと、どうしても忘れてほしくないのが、変えてはいけない部分と変えていかなくちゃいけない部分、この二つだというふうに思うんですね。予想されるのは、デジタル化というのは速読向きなんですね。だから、LINEなんかにあるように、やっぱり短い文章で早くどんどん送っていくという速読の方向なんです。そうすると、気をつけないと短絡的です。子どもたちの思考が短絡的になっていく可能性があって、そうすると、ここでは深い読みができるような、あるいは長文を読みこなしていくことができるような、熟考することが必要な教育は絶対失ってはいけないくて、ここもしっかりとやっていくというのが必要なんだと思うんです。

これは、例えになるかどうかは分かりませんが、今日本が目指しているのは、OECDの学力の考え方なんです。だけど、世界はもう一つあって、バカロレアの考え方もあるわけですね。日本の宇宙飛行士の星出さんは、バカロレアの学校を出ているわけでございます。そうすると、ああいう寄宿舎制みたいなところの中で生活しながら、バカロレアの考え方で世界で活躍している人たちもいるので、川崎はOECDだけではなく、バカロレアの学力のよさとか、そこもしっかりと見つめながらいかないといけないんじゃないかなと。つまり、多様性を本当に生かしていくといたときに、一つの視点だけではなく、もう一つの視点も入れながらやっていくのも必要なんじゃないかなというような思いがあったので、岩切委員のお話を聞いて、それをふっと思ったものですから、発言させていただきました。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

小田嶋教育長 各委員それぞれの経験ですとか、専門とか、立場から非常に示唆に富む御意見を伺っているなどと思っています。

岡田委員がおっしゃった二極化した教員の私はどっちに入るのかなという不安を本当に、以前にもちよつと打合わせをしたときに、皆さんはいろんな経験をしている中で、自分が一番遅れているだろうなど、今日の日までにZ o o mは経験しなきゃいけないと思って、先々週経験しました。今週末にはオンライン飲み会もする予定で、ついていこうと思っている状態はさておきですが、先生の負担ですとか、いろいろな御意見があったんですけど、この1人1台端末によって、どのようなことが具体的にできるのかというのは、実際のところ、教員は今、本当にコロナの対応に追われていたりで、イメージがまだ浮かんでいない面があると思いますし、私自身も今言いましたように経験していないことなので同様でございます。

でも、川崎の場合は、本当にこれから総合教育センターを中心に研修もしっかり体制をつくっていきましょし、各研究会はこういった新しいことに積極的に挑戦していく川崎の研究会だと思しますので、本当にそのところはしっかりやっけていけるだろうなどと思っています。

校長会のほうでも、いろいろ心配してしまして、懇談の中でも、校長さんたちも私と同じような部分が大きいかなと思ひますが、そこで紹介していたのは、ぜひ、先進地区の事例ですとか、あるいは川崎の先進校、附属中学校なんかがあるんですが、そういった活用事例をぜひ参考にしてほしいということで、御紹介しています。

私もそれで、インターネットを通じてそういったものの情報を得る中で、なるほどな、こういう活用ができるんだなということを感じていました。

特に、熊本市は早くて、3年前から地震被害の復興に合わせて導入して効果を上げているということで、積極的な発信もしております。

その動画等を見てみますと、本当すばらしい実践につながっているなど思うんですが、一言で言うと、学習の場が、やっぱり自分の机とか教室というところから離れて、大きく広がっていく。それが世界にももちろんつながっていくわけですが、そんな可能性というのが非常に示されていますし、また自分で調べたり取材したりしたことを、動画や画像を活用して表現していくと。表現したことを、ほかの人と比較したり修正したりして、そういったことが自分の学習記録として残っていくと。その中で、一人でじっくり考えるとことと、ほかの子どもたちと対話していくことが、自分の自主的な活動につながっていつて、それを自己評価していけるような、そういった様子が動画等で紹介されていつて、非常に魅力的でありますし、興味深いなというふうに感じました。

そういった先進のモデルですとか、あと民間はもっと前から、進学塾系もそうですし、教育機関ベネッセ等もそうですが、かなりいろいろなことをやっけていつていくということで、やっぱりこういったものは、そういった先進モデルからどんどん吸収して取り入れていつていくという姿勢が必要なのではないかなというふう私自身考えていつて、校長会にもそんな話をしたことです。

ただ、大事なことは、こちらありましたように、あくまでもこれは端末の活用は基本的に手段でありますので、どんなふう授業が変わっても、その学習で目指すべき目標とか、育てたい身につけさせる力は何なのかということ絶対忘れずに、それを第一に十分考えて学習計画を立てていつていくことが必要だというふう考えています。

あと、先ほど高橋委員からありました、個に応じる部分ですが、本当に学習の方法や形態や内容は非常に大きく可能性が広がっていつて、誰一人取り残さないという点では、個別学習が本当の意味で個に応じた学習が充実していつていくということで、期待するものも大きくて、特にデジタル教科書が今後活用されていつていく効果は大変大きいのではないかなというふうに思いつていつて、先ほどのように、学習障害があつたりとか、日本語の習得が不十分であつたりする、そういった児童生徒が、児童生徒用のデジタル教科書を使用するこ

とで、サポートできる機能がたくさんあって、そしてまた、ほかの生徒も自分の書き込みなど、学習の足跡を残せたりして、またデジタル教材もデジタル教科書の場合、一体となっていますので、そういったことをうまく併せて使っている効果は非常に大きいだろうなと思います。

ただ、費用面の課題ですとか、来年度からすぐというわけにはいかないと思いますが、このところ、文科省が2024年度から、今度2024年度に次期小学校の教科書の改訂があるんですが、そのところから本格導入していく検討を、そういった方向性を示したりしているということで、今後、期待できるのかなというふうに思います。

そういった部分ですとか、ほかにも、多様性という視点で見たときに、自分たちの考えや考え方を、どのようにクラス全体で共有していくかというのは、私も自分で授業をやっていたときに、とても大事なことなんだけど、手順もかかるし時間もかかる。それが、一遍に即時的にできて、クラスだけではなく学年全体とか、あるいは先ほどもあったように、ほかの地域とか教室を出たところにつながって比較したりとか、その一つを取っても私は結構わくわく感がある取組だということで、そういった様々な意見があったり考え方があるということ、授業のいろいろな場面、どの教科でも積み重ねていくことが、やはり多様性の尊重ということにも本当重なっていくと。いろいろな可能性を秘めた、このGIGAスクール構想を、本当に効果的にやっていくために、皆さんから頂いた意見をしっかりと取り入れていかなければいけないなと、そんなふうに感じたところです。

以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

様々な御意見を頂きましたけれども、最初に話したように、令和5年度までにやろうとしていた話が令和2年度末までに全てをという話で、これは教育委員会も学校現場も本当にバタバタということは間違いない話で、かつ、全国一斉に始まるので、先ほどサポート体制の話がありましたけれども「サポートする人材が全国にどれだけいるのか」そういう話なんですよね。それも、一斉に各校に配置していく、ということですから「端末も本当に揃えられるの」ということから、「人材も揃えられるか」ということもそうですし、とにかく手探りの中でしっかりやっていかななくてはいけないということは間違いないですけども、サポート体制というのは本当に大事だと思います。いろいろな意味でお話が出たように、教員のサポートということもそうでしょうし、あるいは「どう使うの」という基本的なところからも格差が生まれてしまって、逆におかしくなってしまうんじゃないか、という懸念もそのとおりだと思います。

そういった意味で、GIGAスクール構想によって、プラスのポジティブな話というのは、「これもあれもできる」ということもあるんですが、これによって実はいわゆるネガティブな部分ですね、「こういうところが失われるんじゃないか」とか、「どういうことが子どもたちの今までやっていたところから後退してしまう懸念がある」とか、そういうところをしっかりと把握しておく必要があるだろうと。

先ほどの、冒頭の話じゃないですけども、そういったものをどう逆にカバーできるのかということプログラムの中でしっかり考えていく必要があるのではないかと、皆様の御意見を聞きながら、強く思わせていただきました。

利点といえば、今、教育長が言われたように、学習塾なんかではよくやっているような話で、「この子はどこが弱い」とか、「どこが何間違えているよね」とか個別な記録が取れて、そしてそこに補完していくという意味では、本当に個別最適な学習というのがいいと思うんですが、私は自分の同級生が県外の高校の教員をやっているのですが、私学ですからZoomで授業をやっているのを僕はちょっと入らせてもらって見させてもらったんですね。非常におもしろくていい授業をやっているなと思ったんですけど、ここから見ると、これはいい授業をやっている先生と、それほどでもないというような方たちと、非常によく分かるというふうになると、TEDの話だとかいうのが出ましたけれども、すばらしい授業をやっている、これはお

もしろいな、こういう指導の仕方があるんだというのは、まさに一斉にやれる。だけど、それをカバーしていけるというのは、もう少し個別にやっていかなければいけないとか、いろいろな使い方というふうなのがあるんだと思うんですね。

ですから、学習スタイルも、先ほど資料にありましたけれども、一斉個別共同学習って、それぞれのところでどういうことができ、逆にどういうことが不得手なのかということをしかりと切り出して、川崎の現状に合ったものというのを、しかり地に足をつけてという話がありましたけれども、やっていかなければならないなということを思いました。

今年の春、ちょうどコロナ第一波が一番ひどかったときですけれども、川崎の高校生で、興味のある子ということで学校からも推薦をいただいて、スタンフォード大学と **Stanford e-kawasaki** というものをやりました。これは子ども・若者応援基金を使った取組なんですけど、少し子どもたちの可能性を、グローバル人材を育てよう、伸ばそう、ということでやって、30人ぐらいだったでしょうか。20人ぐらいだったかな。市内の高校生に参加してもらいました。

元々は、教室の中に子どもたちが集まって、スタンフォードにいる教授との対話を通じた授業というのを繰り返しやっていくということだったんですけど、コロナ禍であったので、それぞれ自宅でZoomで参加という形でやったんですけど、皆さん、最初懸念があったんですけど、高校2年生が一番多かったですかね、1年生も2年生もいたんですけど、英語で大丈夫かというのがあったんですけど実に見事に皆さんやって、スタンフォードの教育というか、アントレプレナーシップと、それからダイバーシティについて考えようというテーマで、ずっとシリーズでやってきたんですけど、ああいうことができるというのはまさにICTの力なので、スタンフォード、現場に行かなければできなかった話が、世界とつながると中村委員が言ったように、ああいうことができるんだということに非常に喜びを子どもたちも感じていたというのは、一つの経験として、あるいは私たちの去年初めてやってみた取組ですけれども、こういうことが日常になっていくのかなという可能性も感じた取組でした。

僕も、そのとき初めてZoomってこういうものなのかということを知ったんですけども、こういう学習の方法もあるのかと。ですから、可能性もすごくあるんですけども、学び合いだとか、先ほど岩切委員が言われたような、知識理解は得られたとしても、つながりだとか校風だとか文化だとかというものを、どうこれを共有できるのかというのには、これはやっぱり課題がたくさんあると思いますので、その課題の部分を、繰り返しになりますけれども、しかりと把握しておくことが、把握しながらその解決策がどこに持っていけるかという、代替案を考えなければならぬかなと思っております。

ほぼ、予定の時間になりましたけれども、その他、論点以外にお気づきの点がありましたら、ぜひこの際御発言を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

小田嶋教育長 私は冒頭にコロナの課題と対応ということで、各学年に応じた体験ができなくなっているということでお話させていただきましたけれども、平成8年の中教審の答申の中に、その中で教育における不易流行という言葉が出て、一時すごくはやったことがあるんですね。流行の部分というのは、本当このGIGAスクールなんていうのは、まさに流行の部分であるし、あとはコロナのこういった感染の広がりというのは、まさにそうであるのかな。

その中で、やはり不易の部分というのをしかり見定めて、先ほども言いましたように、育てたい子どもの姿を明確にして、不易の部分というのを、このGIGAスクールを進めていく中でも忘れてはいけないということが、冒頭申し上げました子どもたちの体験的にモデル的なものをここに接していったり、それを演じたりすることが今はできていない状況をどう補っていくのかなということとつながるのかなと思っております。

この、コロナ禍の休校のときに、Zoomを通じて子どもたちが毎日子どもたち同士で会話ができて、つ

ながりを感じられている。でも、その子たちも早く学校に行って皆に会いたいと言っている、そういう声を読んだことがありますけど、やっぱり「リアルなつながり」ということ、子どもたちも学校の中でつながること自体の意味に改めて気づいているのかな。そういった意味では、学校の学級や学年、また学校全体の、そういった組織的環境の中で学ぶことの意味というのが、そこがまさに対話的な学びで関係性の中の学びでもあり、共同的な学び、共生的な学び、そういった学校の持つ機能、価値というものをしっかり見定めていくということが、先ほどもありました不易の部分だと。その辺について改めて確認しながら、今後、コロナ対応、またGIGAスクールをしっかりと進めていくということが必要かなと感じたところです。

以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

今日も、本当に闊達な御意見を頂きましてありがとうございました。頂いた御意見は、また教育委員会の中でもしっかり生かしていただければと思っています。

では、特になければ、これで終了したいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

それでは、司会は戻します。

宮崎都市政策部長 ありがとうございます。

次回の会議につきましては、今後、お知らせをさせていただきます。

これもちまして、令和2年度第1回川崎市総合教育会議を閉会させていただきます。

16時30分 閉会